

◆荒井良明 選

《え〜、あの大俳人がこんな滑稽句を…》

彼岸婆々(ひがんばば)阿難(あなん)の険(けん)を越えゆけり 飯田蛇笏

阿難とは仏弟子の阿難尊者。蛇笏の地方の峠に阿難峠というのがあり、土俗では「をんな峠」と言われているという。「険」とは、「山などのけわしいこと。また、その場所。難所。(小学館・デジタル大辞泉)」であり、♪箱根の山は天下の険(作詞：鳥居忱、作曲：瀧廉太郎、「箱根八里」)の険である。

阿部笥人著『俳句』(講談社学術文庫)によると、〈婆様たちがぞろぞろ歩いて行ける峠が「険」とは言えませんが、それを強いていう点に、女の危険年齢の「険」を響かせるのが作者の意図となるわけです。つまり危険年齢も過ぎた彼岸婆、後生を願う梅干婆になったという、何のことなき洒落でした。謹厳な作者が泥臭い洒落を飛ばしたことが、一同を吹き出させる楽しい情景(以下略)とある。

「俳句の『俳』は人を笑わせるという意味」。これは、高柳克弘が読売新聞の「K O D O M O 俳句」の選評の冒頭で述べた言葉だが、そういう意味で言うと、飯田蛇笏は前掲の滑稽句までも残したことで、本当の「俳人」たることを示した。

ぬぎすてし人の温みや花衣 蛇笏

冬川に出て何を見る人の妻 蛇笏

お母さん寝正月にはしないから 林七々恵・小五

初もうで必ずかたてに焼だんご 栗山愛梨・小四

《「ぼ」の可笑しさ》

ただならぬ海月ぼ光追い抜くぼ 田島健一

「新感覚非日常派真骨頂」。田島健一のこの句はとにかくおかしい(可笑しい)。私は「無意味」と「非日常」を前面に押し出した「オシャレ」で「ファッションナブル」な俳句を詠もうとは思わないが、たまにはこういう俳句を鑑賞するのもいい。石寒太が宇多喜代子との対談で語っていたが、句会で「ぼ」という席題が出て、この句ができたそう。「無意味之真実感合探求」。田島健一の面目

躍如たる句。

《連想が生む面白さ》

歯にあてゝ雪の香ふかき林檎かな 渡辺水巴

これを滑稽句だと言われて、首をかしげる人も多いと思う。私がこの句を見てニヤッとしたのは、次の歌（短歌）が思い出されたからだ。

君かへす朝の舗石さくさくと

雪よ林檎の香のごとくふれ 北原白秋

水巴は一八八二（明治十五）年出生、昭和二十一年没。白秋は一八八五（明治十八）年出生、昭和十七年没。二人は同世代の人とっていいだろう。

その二人が「雪の香ふかき林檎」「雪よ林檎の香のごとく」と喩えの方向は逆ながら、同じような発想の作品（俳句・短歌）をものしている面白さ。

白秋の歌の「君」は人妻で、二人は不倫をしている仲。人妻との「後朝（きぬぎぬ）の別れ」（男女が一夜をともにした翌朝の別れ）である。水巴の句にそういう色っぽいことがあるかどうかは知らぬが、面白く感じた。

《名前を詠み込んでなにやら可笑しい》

表札は三橋敏雄留守の梅 三橋敏雄

呼んでいただく我名は澄子水に雲 池田澄子

師弟ともに名前を詠み込んだ句を詠んでいる。こういうのはコロンブスの卵で同じことをやっても亜流になるだけだが、さすがに池田澄子、上手にまとめている。名前が「澄子」だから「水に雲」の澄んだ景色が生きてくる。両者の句に、滑稽さ（諧謔味）を感じませんか。

試みにひとつ作ってみました。駄句御免。

良明と呼ばれつ不良したる夏 良明

《重い内容も滑稽の味付けで》

憲兵の前で滑って転んぢやつた 渡辺白泉

この句は無季の名句（昭和十五年「京大俳句」に載った）。治安維持法があり、特高警察や憲兵が言論に（俳句にも）目を光らせていた時代に、これはスゴイ

というしかない。

〈「憲兵」は軍部内の警察で、兵にとってはこわい存在だが、部外に手を出すことは建前上ない。しかし、この句は国民一人々々にとってもこわい存在になるだろうことを、おどけて、動作で描いてみせたものである。〉（神田秀夫、朝日文庫「現代俳句の世界」16より）

渡辺白泉の俳句

銃後といふ不思議な町を丘で見た
まんじゅしやげ昔おいらん泣きました
マリが住む地球に原爆などあるな
戦争が廊下の奥に立ってゐた
玉音を理解せし者前に出よ
繻帯を巻かれ巨大な兵となる

（文中敬称略）